

令和6年2月20日

南の風 OQT (オリンピック女子最終予選) 特集号VI

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

特集号Vの続きになります。OQT を終えた後の恩塚ヘッドのコメントです。

「一番の大きな収穫は勝てるところで勝てば勝てることです」と語りました。「だから、ないものを見ようとするのではなく、持っているもので最強の戦い方をする。パリに向けてそれが一番大事だと思います。勝ち筋をちゃんと作れたし、選手たちもそれを信じてやってくれています」

この戦い方を示す象徴的なものが、ドライブ後にオフバランスから放つレイアップが減ったことです。恩塚ヘッドはその理由をこう明かします。「今回の合宿を始めるにあたって代表チームの課題を掘り下げて見た時、難しいペイントショットを打ち過ぎていました。フィニッシュのスキルは当然高めていかなければいけないですが、頑張っただけでシュートを打ったけど外れてしまった、みたいな感じでオフェンスを終えるのは一番もったいない。それを改善しようと思いました」

また、これまでの日本は、ゴール下で懸命に守っても最終的に相手のサイズとフィジカルに屈して失点した時などに足が止まる傾向があった。しかし、今回のチームは『勝てるところで勝つ』という明確なスタイルがよって、良い意味でこの点を割り切れており、それが結果としてこれまでの大会と比べて、得点を取れる要因となりました。以下恩塚ヘッドの言葉です。

「やられたらやり返せばいい、どうにもならない時もあるから取られたら取り返す。ミスや失点を気にしたり落ち込んだりするよりも、やられたらやり返そうぜとは言っていましたので、その結果かもしれないです」

振り返れば日本は、ワールドカップ、アジアカップ、アジア競技大会と思うような結果を残せずきました。そして戦い方や選手選考など、さまざまなノイズが聞こえてくる状況になりました。ただ恩塚ヘッドは、「いろいろ言われることに、多少は傷ついたりもしますが」と明かしたうえで、次のことにフォーカスしていたようです。「率直な話で言うと、ワールドカップのときは、選手の力を出し切れなかったことに対してただただ申し訳なかったです。実はさっきリツ（高田真希選手）にも謝りましたけど、ずっとこの思いがありました。選手たちと芯を食った話ができいたわけではなかったです。周りがどうこうというよりは、選手が納得感を持って、熱い気持ちでできるようにすることに集中していました」

そして、選手に対するコミュニケーションの取り方も変えたということです。「一番の変化は、チームのスタンダードに合わない行為への対応です。ワールドカップまでは、後でその個人に向けてのみ話をしていて、他の選手たちから『あれでいいんですか？』と思われていました。リーダーの仕事は、みんなにビジョン、スタンダードを示すことだと思うので、それがみんなに明確になるように学び直しました」

恩塚ヘッド自身ノイズを払拭する結果を残したことに、「見返してやった」という思いがあるのか尋ねると、「正直くはないんですけど、ほとんどないですね」と語りました。「そこと向き合うよりは目の前の選手がどうやったら力を出せるとか、勝ち筋をひたすら考えていました。ワールドカップが終わってから1年と3カ月くらいは、人生で一番勉強しました」

今回のパリ五輪出場権獲得は、代表に選ばれた12人に加え、当然、惜しくも選考に漏れたものの合宿に参加した選手全員の貢献によるものだと思います！ 続きは次号します。